

子ども・若者たちはなぜ「北」を目指すのか？ —メキシコ・中米に広がる格差と暴力

工藤 律子

メキシコでは、ペニャ・ニエト現政権任期中に、14万人以上の子ども（未成年者）移民が移民局に拘束されたという。そのうちの6万人あまりは、単独で旅をしていた。特に多いのが、中米のグアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラスから来た子どもたちだ。

前回、子ども移民について取材した2014年には、前年10月からの約8か月間に5万人を超える未成年者が、先述の3か国からメキシコを通過して米国国境に押し寄せていた。オバマ政権による人道的支援もあり、その後の数年間はその波が穏やかになっていたが、トランプ政権による移民排除政策を受けて、再び大波へと転じつつある。

米国はメキシコに対策費と人材を投入し、メキシコ政府にグアテマラ・メキシコ間の「南の国境」で、子どもに限らず大勢の不法移民を拘束し、「北」にたどり着く前に強制送還させている。

2018年1月から5月末までに、すでに1万2,625人の子ども移民が、メキシコ国内で拘束され、その8割以上は母国へ送り返された。故郷の社会を覆う貧困と若者ギャング団「マラス」による暴力から脱するために「北」を目指す子ども・若者たちの多くが、危険の中へと再び投げ込まれている。



アリシア（仮名）は、働きづめの子ども時代から現在に至るまでのことを、詳細に語る。（写真はすべてフォトジャーナリスト 篠田有史撮影）

難民となった子どもたち

メキシコで運良く難民に認定され、NGO（非政府組織）の施設に保護されて、自立できるまでの支援

を受けることになった子どもたちは、少数派だ。

「今は幸せ！このまま進学して、子どもの頃からの夢である、農業工学を学びたいわ」。アリシア（仮名・17歳）は、2時間近くにおよぶ身の上話の末に、そう微笑んだ。彼女は今、首都メキシコシティにあるNGOの施設で生活している。2017年の3月、ホンジュラスの農村部で母親と暮らしながら通っていた中学校の近くで、以前、首都テグシガルパに住んでいた頃に「仲間になれ」と迫ってきたマラス・メンバーの青年をみかけ、恐怖のあまり、国を出る決意をした。「仲間になれという誘いを受けて困っている時に、田舎へ引っ越すことになったので、もう大丈夫だと思っていたら、ある日、携帯電話に“おまえがどこに住んでいるか、知っているぞ、通っている学校もわかっている”というメッセージが届くようになったの。その直後にあの男を見かけて、ここにはもう逃げられない、と感じた」

それからすぐに、無一文に近い状態のまま、多少のお金を持っていた友人とともに、グアテマラ国境へと向かった。そして、運を味方に徒歩とヒッチハイクでメキシコへ。グアテマラとの国境に近い町、テノシケまでたどり着く。そこで「移民の家」を教えられ、メキシコでやっと安心できる滞在場所を手に入れる。

テノシケにある「移民の家」は、300人前後が滞在可能な大きな施設で、隣国からきた不法移民を、日常生活と法的手続きの両面で支援しているという。アリシアは、そこに滞在しながら難民認定の手続きを進め、今年8月ようやく今いるNGO施設にきた。「一緒に国を出た友人は、途中で移民の家を去り、米国へ向かったわ。私は移民の家で知り合った同国人の青年と恋に落ち、彼が伯父のいるメキシコシティを目指していたので、自分もそうしようと思ったの。でも、途中で別の施設に収容されるなど、いろいろまわり道をした末に、ここにたどり着いた」。とはいえ、現在は施設でメキシコの成人教育制度（INEA）を通して勉強を続けており、母国で中退した中学をきちんと卒業し高校へ進学、大学で農業工学を専攻する夢を追う。「ホンジュラスでは、家が貧しく、2

歳の時から実父母と離れて暮らし、いつも他人の家で、学校へ通わせてもらう代わりに家事労働を強いられてた。それでも「勉強できるなら」と我慢してたわ。でもこれからは、自分らしい人生を歩みたい」

アリシアを支援している NGO では、「移民少年」で難民認定を受けた子どもを受け入れる専門施設を、2016年に開いた。が、そこには今、定員の半分にも満たない8名前後の少年しか住んでいない。開設当初はその倍はいたのに、だ。同 NGO の所長は、「あまりに大勢の子ども移民に対応しなければならない移民局が、難民認定の必要な子どもをきちんと審査しないために、施設にくる子どもが少ないのではないかと思います」と話す。

以前から、子ども移民がメキシコで難民認定を受けることは簡単ではなかったが、米国へ入国できずにメキシコで保護される子どもが増えれば増えるほど、難民に認定される確率も下がっている。メキシコ政府は、自分たちを含む「富裕層」の利害を最優先するように築かれた、この国の政治・経済システムとそれに沿った政策の下、中米の貧困家庭の少年少女を支援する政策には、十分な予算をつぎ込まないからだ。メキシコ人自身もそのせいで、貧困や麻薬戦争がもたらす危険を逃れるために米国への不法入国を考えざるを得ないのだから、当然だろう。



アンドレス（左）は、「パパ」と呼び敬愛するメキシコ人の友人との久々の再会を喜んだ。

マラスの「恐怖」と「アイデンティティ」

アリシアと同じ NGO の施設で支援を受け、19歳で自立したホンジュラス人の青年、アンドレス（21歳）は、自分の幸運を嘸みしめながらも、重苦しい過去を抱えて難民として生きるなか、不安定な生活を送る。

彼は、16歳の時、所属していたマラスの下部組織

で「一人殺してこい」という命令を受け、それに従わずに生き延びるために決死の覚悟で故郷を飛び出し、ひとり、メキシコにたどり着いた。そして5か月近い時を経て、ついに安心して生きられる環境、メキシコシティの NGO 施設での生活を手にする。命令に従わないと裏切り者とみなされ殺される、という恐怖から解放され、施設生活の間に中学卒業の資格をとり、一流ホテルでの職業訓練を受け、そこで働き始めた。

彼の故郷、サン・ペドロ・スーラは、ホンジュラスでもっともマラスの支配が強い町で、そのスラムに生まれ育つ少年たちは、よほど運がよくない限り、アリシアを脅した青年たちのように、マラスに入るはめになる。それは、地域で唯一羽振りのいい大人たち＝マラスメンバーへの憧れからであったり、入らないとひどい目にあうと脅された結果であったり、ほかに選択肢がみつからないからであったり……。アンドレスも、マラスとつながる麻薬の売人をしてきた父親への憧れや、その父親が敵対するマラスに殺されたことから生まれた復讐心などから、マラスの下っ端として働くようになった。今では「考えが甘かった」と語るが、中米の貧困地域に生きる少年たちの多くは、そうやっていつのまにか「マラス」などの犯罪組織に組み込まれる。

敵と見なせば容赦なく殺し、縄張り争いを繰り返しながら、麻薬密売や暗殺、恐喝で大金を稼ぐマラスに、恐怖を感じながらも、それに所属することで自分が何者かになったような気分、「アイデンティティ」を得る子どもたちが、そこには存在する。米国へ出稼ぎに行ったきり戻らない、あるいは麻薬や酒に浸り、家庭を顧みない親たちに見捨てられた子どもは、仲間意識が強く、ある意味「家族的」なマ



「ホベネス・オルケスタ」の子どもたちと、フアン・カルロスさん（中央）。

ラスや麻薬犯罪組織に、自分の居場所を見出す。アンドレスも、そんな少年の一人だった。が、今は、時々やけになって愚かな行為を繰り返すこともあるが、不運な幼年・少年期の果てに手にした幸運を再確認しては、「本来、自分は何を目指しているのか」を自問自答しながら、前へ進もうとしている。

機会を与えられない若者たち

「教育と仕事、そのどちらか、もしくは両方さえあれば、若者たちは決して、今のように暴力や犯罪には走らないと思います」

そう言い切るフェルナンド（20歳）は、メキシコシティの北外れに位置するスラムで、子どもや若者に楽器演奏を教える NGO「ホベネス・オルケスタ」の指導員をしながら、そこで用いる民族楽器を作る工房で働く。彼自身、高校時代は「パンディージャ」と呼ばれる少年ギャング団の連中とつるんでいた。

「僕自身は、暇つぶしのノリで彼らと付き合っていました。そこに集まる少年たちの大半は、親が麻薬や酒浸りで子どもにまったく構ってくれない家庭の子でした。だから、勉強にも身が入らないし、かといって、まともに働いて普通に稼げる仕事にもありつけない。そこへ、ギャング団や麻薬犯罪組織がうまい具合に選択肢を与えてくれるのです」

この状況を変えるために、彼は「ホベネス・オルケスタ」と、楽器製作工房の活動に力を入れる。

「メキシコでは、勉強が好きな子はそれを続けられ、ほかの仕事をした子はそれが選択できる経済・社会的環境を築くことが、最も肝心なんです」

彼が所属する「ホベネス・オルケスタ」は、ファン・カルロス・カルサーダさん（60歳）が創った団体で、現在、メキシコシティのスラム5か所で、子ども・若者、その親の世代に、ギターや民族楽器を使った音楽を教えている。ファン・カルロスさんは、自宅二階にそこで使用する楽器製作の工房も持つ。その工房では、地域の大人に商品価値の高い楽器作りを教えており、フェルナンドもそこで働いている。ファン・カルロスさんは言う。

「音楽をはじめ、芸術には、人々に生活の糧を提供するだけでなく、社会を変える力があります。それを新政権に訴え、社会を変える活動を広げていきたいと思っています」

終わらぬ戦争、変革への希望

メキシコでは今年7月の大統領選挙で、貧困層を中心とする民衆の支持を得た新興左派政党モレーナ（国家再生運動）が上・下院議会や地方選挙でも圧勝し、同党のアンドレス・マヌエル・ロベス・オブラドル（通称 AMLO）が次期大統領に選ばれた。AMLO とその支持者にとっては、まさに「3度目の正直」。過去2回の大統領選立候補の際も、まともな選挙が行われていれば（開票集計のコンピュータのダウンやメディア独占、賄賂のばら撒きなどがなければ）、おそらく彼が勝利したであろうと言われるほど、「待望の勝利」だった。ファン・カルロスさんをはじめとする社会活動家、フェルナンドを含む多くの貧困層の若者たちが、AMLO とモレーナに一票を投じた。それはまさに、「嘘と腐敗と暴力はもうたくさんだ」という人々の叫びだった。

2006年12月に発足したカルデロン政権から現在のペニャ・ニエト政権に至る約12年間に、25万人以上が麻薬戦争（麻薬カルテル絡みの殺害・誘拐事件）で命を奪われ、3万とも4万とも言われる人々が、行方不明になっている。それは80年間以上、権力を意のままにしてきた制度的革命党（PRI）と、フォックス、カルデロンの2期12年、政権を担った国民行動党（PAN）の政策が生み出した悪夢だ。これを変えられるのは、本気で変革を目指す市民社会の活動家と若者たち、そして彼らの声を聞く耳を持つ新政権のみだと、メキシコ国民は判断した。

1980年代半ば、私が留学生として初めて滞在したメキシコは、経済的には今より貧しい国だった。が、そこにはまだ「未来への希望」があった。人々は、「共に頑張れば、共によくなれる」という思いを抱いていた。ところがその後、「新興国」と呼ばれ、経済指標が上がるにつれて、貧富の差は拡大し、貧困層の間でも個人主義がはびこり、連帯や倫理よりも個人の経済的利益が優先される社会となった。それは、メキシコや中米はもちろん、日本を含む世界各地で起きていることだろう。ただ、メキシコや中米のように、「北」の大国の利害に翻弄され、政治・経済界の権力者がその利害に追従する国々では、国の未来自体が民衆の手にはなく、未来を奪われた人々は、危険や暴力、犯罪と背中合わせであっても、自分たちに残された選択肢－麻薬犯罪組織、マラス、不法移民－に走らざるを得ない。それが、移民の波を生み、マラスを凶悪化し、麻薬戦争を激化させている。

メキシコの新政権への期待と連動する市民社会の存在は、この現実を変えるための新たな希望だと、私には思える。

(くどう りつこ ジャーナリスト)

ラテンアメリカ参考図書案内



『ギャングを抜けて。一僕は誰も殺さない』

工藤 律子 合同出版
2018年6月 157頁 1,560円+税 ISBN978-4-7726-1346-0

ホンジュラス第二の都市サン・ペドロ・スーラ生まれで、16歳でホンジュラスを離れ現在はメキシコ市に住む20歳の少年アンドレスが、なぜ故郷を離れたか、どのようにメキシコ市まで辿り着いたか、そこで難民申請をして幸い認められ NGO 施設に移って新しい生活を始め人生を切り拓くまでを紹介したドキュメンタリー。

中米にはメキシコやコロンビアの麻薬カルテルと手を組み、店などからみかじめ料を取り、誘拐や殺人を行う「マラス」という若者ギャング団が横行し、彼らに目を付けられるとその仲間に入るか、難をさけて故郷を捨てて逃げなければならなくなる。アンドレスも一時地元のマラスに加わるが、他のギャング集団の縄張りに入ってしまう、その報復でよく似た少年が殺されたことから身の危険を感じて故国を脱出することにし、グアテマラを通過しメキシコに向かった。

2014年にメキシコでストリートチルドレン取材していてアンドレスに出会ってインタビューし、2016年に『マラス—暴力に支配される少年たち』(集英社)執筆にあたり、さらに対話を重ねて纏めたもの。彼なりにもがいて自分の道を切り拓いてきたアンドレスは自身へのエールもこめて「自分が進むべき道は自分で創るんだ。そうすれば、人生はきっと生きるに値するものになる」と語っている。
(桜井 敏浩)



『キューバと日本—知られざる日系人の足跡—』

ロランド・アルバレス、マルタ・グスマン 西崎素子訳 彩流社
2018年9月 255頁 2,200円+税 ISBN978-4-7791-2522-5

キューバに最初の日本人移民が入ったのは1898年で、1943年までにおよそ1,750人が記録されている。本書は、移民の事例、入植の経緯、家族、生業、出身、日本人移民の特徴を多くの歴史的な写真とともに載せていて、花卉栽培家・園芸家として活躍した竹内憲治、湿地を耕地に変えた大江三郎、稲作と鉱業、漁業技術、野球・柔道・空手道、絵画・音楽界における日本人の貢献と存在を紹介している。さらに1959年1月のキューバ革命成就と日系移民、第二次世界大戦時の日本人の監獄収容、それがもたらした日系社会の断絶と社会崩壊、その後の日本人会再建の試み、日本人の減少とキューバ国籍取得者の増加を、キューバの移民研究者と外交官が文献調査と日本人移民から聞き取りによって追跡した共著である。

2019年の日本・キューバ外交関係樹立90周年にちなみ、前版『ゲバラの国の日本人—キューバに生きた、赴いた日本人100年史』(VIENT 2005年)を再編集し資料を追加して再刊したもの。
(桜井 敏浩)